

# ★世界赤軍への我々の道

- ハイジャック―獄中兵士暴動斗争勝利万々、
  - 世界革命戦争―帝国内部革命戦争勝利、
  - 組織された暴力とプロレタリア国際主義、のもと
  - 、世界赤軍―世界革命戦争を拡大せよ、
  - 世界革命の進行機関―第五インター―世界革命戦線
- (を準備せよ)。

九・二八・一〇のハイジャック斗争は日本帝国主义に対する赤軍の完全な勝利をも、て貫徹された。今回の斗争に対して党の国際局と統一赤軍・赤軍の第一陣より若干のコメントが発表されたので、あわせてここに公表する。

## 共産主義者同盟赤軍派日本委員長の国際局

日本赤軍の戦斗力、組織力、統制力の強固さとその革命性を日本―国際帝国主义と全世界プロレタリアに確認させ、今回の作戦は完全なる勝利を告げ取った。我々は、この長期の作戦を引いた赤軍戦士・日高隊の同志達に、至らぬ熱い連帯と限りない敬意を表す。この作戦はいくつもの事態を暴露させた。人命尊重を叫び続けて来た日帝國家権力は、その本音が決してそうではなく、むき出しの憎悪をかくすためのウェールに人命尊重を利用しながらその裏で、「人命」の取りひきの引き延ばし等の人命無視のいつもの陰險な手口を露せ、徹底した報道管制とそれに協力するマスコミの「大本營発表」は具体的事実から眼をそらさせ、割り出される「政府隠蔽」のタリ派キャンペーンは帝國主義の危機を、「人民の危機感」へとすりかえる作業をなし、権力による解放運動への「犯人悪化論」のふきこみとあわせ、国内での一種のファシズム的醜態状況を割り出させた。「強行論」のみを掲書として差別するという細かな態度は、国内での反動的行政の準備を各憲法案改「正」の準備として行なうという國家権力の拡大を可能とした。

だが、その種の工作は文表によつて確實に見抜かれるであらう。また赤軍の「勝利したくない」への大家の無形の共鳴は聞錯された帝國主義の雙を大家をして突破される光明としての赤軍の位置の証明である。全国の斗う戦線は赤軍への評価はより拡大された。むしろ帝國主義の支配体制は、米帝からの「カスターの友人は絶対に殺さざるな」という恫喝と帝國主義の抑圧をむねのけ進むとする苦い独立國パンブラディシの独自の判断の面から自己の政治力の弱さと國際政治の現実性の前に敗北し、そこには「人道主義」や「人命尊重」というブルジョアヒューマニズムでの正当も適用しなかつた。

国内の左翼はこの斗いを避けて、二つの道を選択した。ひとつは國家権力への道従と加担の道であり反動弾圧に手を加す事と命をいさする方向である。そしてもうひとつは完全なる沈黙とその中の動搖であり、スウェーデン斗争への逃げこみである。

最もとこみじのな敗北を痛めたのはプロレタリアである。植民地の出獄拒否はプロレタリアの「日本赤軍支持」という一口一丁の茶釜を明らかにし、世界革命戦争へ出陣するなんの内容のない等を自から知らしめた。これは先の日共軍左派の坂口君の「連合赤軍の総括をなす。日本赤軍は誤り」という明確な立場での拒否とはま、たく異なるいわば「保護盾」から出たくないという心積の吐露にすぎない。プロレタリアの叫ぶ「獄中兵士暴動」はつまるところ「獄見保釈要求」に代表される國家権力への保釈請願のブルジョア民主主義の道であり、ところかまわず保釈金刀ンバをお願ひしてまわっている捕虜者の合法主義、日和見主義の路線的結末である。この斗いの渦中京都で開催された「九・三〇獄中兵士暴動宣言」はとこ、けいなしのなかつた。プロレタリア、M.L.派、仏派、遊撃派、赤報派、怒濤派および第二次プロレタリアの総括を軸に分派結成をした者とは考えられぬ完全な野合が合法主義、工業運動主義の一致一点で完成した。しかもそれを裏をあやつるのは、今や社市連の道を選んだ旧プロレタリアのどうぞうたるメンバーであり、その手足となつた政治主張抜きで赤ヘルノンロクト主義大同学会のワケル主義者達であった。露す、た者達の興味半分の政治風土は、將にプロレタリアとは何の縁もゆかりもない、まるでふやけた革命連の集會の加さうわつたものであった。何の核心もふれられぬ集會に全参加者の失望は深かった。語られたのは唯一、合法的に獄見、高原を保釈せよ、という事であり、より反動的には地下斗争を続ける遠田同志に対する結局の支援拒否の態度である。それまでの数年間の毒舌きままる「党派斗争」の仰と口懸えぬ各分派の野合。これ程プロレタリアを侮辱するものはない。プロレタリアはM.L.派、仏派、赤報派と和解する事で第三次野合プロレタリアの議院に捕虜者をつかせる事だけにその政治的延命を託しているようである。しかも遊撃派と共謀する「日中(反社帝)集會」で、正真正正のスターリン主義者旧日共毛派の好音陣営

と手を結ぶ事で、毛派田中M派との偉大な野合も克ち取ったよつである。スターリンの方、毛沢東の方といつ一致でもして、我々は諸君にお進のする。どうか一日も早く痛小なプロト対立など止めて、新党をお創りなさい。合法主義、日和見主義として、細頸的にスターリン主義、毛沢東主義を掲げる新党を、それで諸君の権威する階級主義を脱却する事のでき、正当な党、スターリン党を第二日女として創る事始め可能となるであろうから、我々は諸君の投げ捨てたプロトの旗を諸君に代わって守るから、今日の全てのプロト残党の毛沢東主義への屈服は「ついで」して全てをスターリン主義者へと捧げ天をさる事を可能とした、プロトの旗を掲げる者は、唯一我々のみである。

## 日本赤軍日高隊の同志諸君へ、

### 統一赤軍第一軍

戦友日高隊の同志諸君、我々は諸君の革命的勝利に最大限の鼓舞と連帯を統一赤軍の名をもつて送る事のできるのを無上の喜びとしたい。また我々が統一赤軍の結成を、ポールを発す前に、現実の戦斗へのアッ、ポールを出さずといつ、この現実こそを遂に我が統一赤軍は我々の斗つ道として確認したい。我々は共産同赤軍派の同志達の苦闘を共有し、またそれぞれ戦斗隊の獲得した地平を随衛し、何よりも連合赤軍の同志達の求めた団結と統一の道で革命戦争の斗つの中で継承したいと思う。我々は六九年大阪・東京戦争以降の幾多の勝利と苦闘の日本革命戦争の地平を更に発展させる為、相互の斗いの尊重と検証と自己批判のつえに立ち、日本における統一された革命軍の建設に向けての徹底した討議と交流および共同行動を通じて、今日その団結を組織的に確認する事を可能とした。ここに

第一軍を結成したのである。我々は世界赤軍の一部隊である。我々は世界革命戦争を帝國主義本國・日本で斗つ統一軍論軍である。

今日、日本赤軍を含めた国際テラ戦線の拡大は、世界革命戦争の新しい情勢を創りつつある。帝國主義本國と第三世界を世界革命戦争の國境を越えた斗いで深く結びつけつつある。各國テラ組織の協議機関は、世界革命協議会(W・R・F)や南米の四ヶ国統一機関、ラテンアメリカ革命調整機構(J・R・F)そして南部アフリカ解放の各國同盟として一方での「社会主義」國家をまきこきつつ、巨大な世界革命の先導の役を果しつつある。今こそ、統一のテラテラ世界革命の機関が建設される事を時代は要求している。第五インターの建設である。

世界プロ独樹立へ向けた統一の革命指導機関、戦争陣型の構築が要求されている。我々共産主義は、二つの斗いを同時に果すわけにはいかない。國際帝國主義と世界のいかなるところでも攻撃打倒する斗いと、それに結合する自國帝國主義打倒の斗いである。その戦場は民族性や國家にしばられない。我々共産主義者は世界が戦場であり祖国は持たない。第三世界の民族解放斗争が勝利しなければ、帝國主義本國の解放は存在しないし、帝國主義が打倒されない限り、東の民族、被抑圧人民の解放もあり得ない。これがプロテラテラ國際主義である。一國主義の覆反の「コズモポリタニズム」とは全く別である。一國からして世界革命は始まるが、しかしそれは先進國から後進國を解放していくことが、その後の後進國から先進國に進襲するとかの「コズモポリタニズム」ではないのである。共産主義者にとって目的は全世界の解放であり、世界社会主義から共産主義世界を創り出す事であり、その戦場に國境はない。民族解放斗争の戦斗性を尊重し、帝國主義本國に対してだけの斗争を主張するのは、やはりいすれしその一國主義的自然発生性を止揚しきれていない。現実の世界は、全世界的平等性において攻撃と採取が貫徹されている世界であり、戦争がその政治の主要な傾向である。國際帝國主義の支配の中で、帝國内プロテラテラ、後進國被抑圧人民をして「社会主義」國家内人民も様々な苦悩を表現しており、帝國主義の空間から自由になり得ていない。斗いは國際帝國主義に対する世界プロテラテラ、反帝社会主義世界革命であり、階級斗争の基軸はやはり、ブルジョアジー対プロテラテラ、プロトの世界対決であり、二二二の方のみ世界プロ独樹立、世界共産主義の道が導かれる。共産主義はこのために斗うのであり、幾度も確認するが全世界が戦場である。世界のいかなる所からでも帝國主義に對する斗いはいとまねはならない。それと結合した自國帝國主義打倒があるのである。その道ではない。

今回の日本赤軍日高隊の勝利は國際帝國主義の新たな危機感を創り出し帝國本國の反動化を更に強めつつある。プロテラテラへの道を加速化させている。我々は再び何よりこの帝國主義と、その本國內での革命戦争と世界革命戦争の一部として斗い抜く。同時に國境を越えた世界赤軍の斗いを更に拡大し、世界革命戦争の炎の中で世界プロ独を樹立する斗いを続ける。その軸に我々は必ずや第五インター(世界革命協議会)を建設するであろう。その任務を斗い続ける事で、我が党は七四年再産時の日本赤軍の同志諸君との約束を覆すであろう。國際共同軍事行動の更なる勝利を、団結を、前進を、プロテラテラ世界革命の勝利万歳、